

第二回本音で語る広場：福島

『セカンドハウスはよりどころ 今だから言える「ここさこらんしょ！」』
完了報告書

仲野佳代子（看護コンサルタント株式会社所属）
2012年度（前期）指定公募「市民講座開催への助成」
2013年1月7日提出

1. はじめに

2010年3月、介護経験のあるご家族との交流会で「今だから言える！体験からナースに望むこと」をテーマに家族介護者と医療職・福祉職がざっくばらんに語り合う場を設けたことを発端とし、今の医療をもっと市民に寄り添った温かなものにしたいと願う看護の同志が各地域で市民との「本音で語る広場」を開催しています。

東京でも一昨年3月に公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成を受け第2回目の本音で語る広場を行う予定でした。しかし、東日本大震災という天災と人災を受け、4月に延期しながらも会場一杯の参加者で開催できましたことは感謝の一言でした。

そして、今回その震災で命は救われても、避難生活を送る中で、慢性疾患を抱えながら筋力も衰えて、諦めに向かっている人、亡くなった人たちがいます。福島市内の近隣の医療機関や医療者、福島県の保健・福祉機関、看護師関連機関との密な連携の下、安心を前提に進められているセカンドハウスよりどころ「ここさくらんしょ」で開催することは、入居者及び利用者にとっても、当たり前の生活の再生を前提に、“いのち”と“絆”と“自立した暮らし”が感じられ、復興の力へとつながるのではないかと考えました。

そこで、震災直前に我が家のある双葉町近くの病院に入院し震災後観光バスに乗せられ栃木の病院についた際には命の危険さえあったというご主人を必死の思いで福島に連れ帰り介護を続け、ここさくらんしょの管理もしながらご自身の心の復興も目指している石田喜久子さん、その石田さんの想いを受け止め福島に帰るために奔走しその後も支え見守る南東北福島病院総看護師長の沼崎美津子さん、セカンドハウスよりどころ福島「ここさくらんしょ」の運営研究責任者の村松静子さんの三者で被災・故郷への思い・我が家への思い・家族への思いを語っていただくことを企画いたしました。

また、特別に講師を招いての講演ではなく、石田さんが双葉町の我が家の広大な畑で作物を愛しんで育てていた心のよりどころを、ここさくらんしょの小さな花壇に畑を作ることで取り戻し、そこで収穫したいのちの食材を中心に芋煮鍋を囲み身も心も温まりながら語り合う場をその2として開催いたしました。

2. 実施した内容要約

セカンドハウスよりどころ「ここさくらんしょ」は、介護保険等の制度の枠では不可能な心身のケアをも実施し、生きる支えになるべく生活へのつなぎ役として、ボランティアも入居者も皆一つの家族という意識でいられる一軒家です。ここではみな擬家族であり、仮設や借り上げ住宅で暮らす被災者及び医療関係者や周辺住民、かかわったボランティアナースたちや大学関係者が集まり賑やかに語り合う中で癒しの効果を期待し、さらには、看取り体験者の声を聴く中から、互いに看合い、また、最期も看取れるような仕組みはどうあれば良いのか、どうすればつくれるのか等についても考える機会にすることを目的にしました。

8月18日土曜日、開催当日を迎えました。前日からこらんしょに泊りこみ石田さんと一晩過ごした東京の看護大学生2人。開催時間になり皆さんをお迎えする姿はすっかり実家に帰ってきた孫そのものです。テーブルを配置し、石田さんが作って下さった手料理を盛りつけたり、参加者全員の名札を作ったりと、準備中からすでに二間続きの和室は和やかな雰囲気になっています。石田さんの息子さんも仕事の合間を縫って参加して下さいました。息子さんは福島市内に居住していたため、今回の被災は直接的には受けませんでした。母親をしっかり支え、一時帰宅の際のビデオ撮影や写真に収め記録として保存するなど現実を見据えながら日々をしっかりと過ごしています。

今回8月に開催したのは、若い世代の学生にもさまざまな生き方やいのちについて見聞きする経験をしてほしいと考えたからでした。若い世代につないでいくことも大切な事だと考えるからです。今回の参加者は、地元の医療関係者、地元看護大学の教員と大学院生、仮設住宅で暮らす方、こらんしょの近隣住民の方、介護福祉職の方、ボランティアの方、そして石田さんから見たらひ孫に当たるでしょうか、小さな参加者もあり、様々な職種、幅広い年齢層での語り合いの場となりました。

第1部では、鼎談という形で「ここさこらんしょ」の運営研究責任者の村松さんにリードしてもらいながら、『被災を受けて今感じていること』をテーマに進められました。発言者のレジメ等はなく、対話形式で進められたため、別添の写真と要約での報告となります。まずは石田さんが被災してからこれまでの経過を振り返りながら、地震の怖さと何もできない無力さ、着の身着のまま避難所を転々としそのまま帰れなくなった無念さと東電への不信・怒り、入院中の夫の福島に帰りたい！を実現するまでの不屈な行動、我が家への募る想いとあきらめ、自活の道の模索、先の見えない中でも前向きに生きようとする姿を語り、参加者の涙を誘う一面もありました。沼崎さんからは、震災当日の動きから家族のありがたさや大切さ、病院の幹部としての災害対応の必要性、そして石田さんのご主人が福島に戻るための支援と動きが語られました。村松さんからは、震災を受けて私たち看護師に何が出来るか、熟考した上でのここさこらんしょの始動までの思い、ボランティアの呼びかけに即座に対応してくれたメッセンジャーナースの動き、こらんしょでの生活は叶わなかったけれど、被災者でもある入院中の母親のことで悩んでいた娘さんと、電話でつなぐことで穏やかな最後の看取りを迎えられた方についてのお話をいただきました。

最後に、村松さんから「お二人にとって家族とは？」の投げかけがあり、沼崎さんは、中学1年の時、母親が癌で余命2カ月と宣告され6カ月後に逝くまで、告知はしなかったが父親にしっかり申し送りをしていったこと、ご主人の父親を7年在宅で介護し、胃がんと診断されて亡くなるまで自分のナース力を発揮し父親というその人らしさを理解しながらケアマネジメントをしてきたことが語られ、自分たちがどう生きていくかを教えてくれた存在だとお話しされました。また、石田さんは、家族に見守られていることの大事さを語り、「ご主人で何ですか？」の問いには、一家の柱だから頑張っ

い、杖で歩いてほしいとの思いを話されました。さらに、「家に帰りたいけど帰れない」「自分の家で死にたいけど先が見えない」「先が見えないけど生きなきゃいけない」「いつかは死ぬけど楽しく自分らしく生きたい！」と言葉を結びました。

第2部では、前半の話しを受けて感じたことや自分はこうしてやっていきたいということなどをざっくばらんに話す中からお互い何かが引き合うつながりと信頼とが生まれたように思います。さらに、ボランティアナースにピカピカに磨き上げられた石田さんのご主人も車いすで特別参加して下さいました。

11月17日土曜日、この日は事前の参加申し込みが少なく、蓋をあけるまで分からないという状況でしたが、石田さんを中心として、実行委員と協力者で芋煮なべの仕込みをしているうちに、仮設住宅や借り上げ住宅に居住する方や石田さんのお知り合いの方が参加され、15名の参加者で掘りごたつに足を入れ、アツアツの芋煮をいただきながら、それぞれ仮設等での暮らしの話しや、健康の話し、一時帰宅の際の様子、今後に向けての不安や覚悟が時間が足りないくらいに語られました。方言で普段話しているそのままの様子で、話しているその姿や笑顔は、先の見えない不安な状況の中でも、自分たちの生活を取り戻そうとする前向きさを感じました。

3. 実施しての感想

今回、本音で語る広場を2回開催したその背景には、幅広い年齢層で様々な職種の人たちと一緒に考えることも大事ですが、被災を受けて国の方針もはっきりと決まらない状況の下、狭い仮設住宅の中で不安を抱えている方々が、今の思いを率直に吐き出せる場も1年半たった今だからこそ必要だと考えました。心身ともにリラックスできるのは我が家と思える空間で、東北では定番の芋煮を囲むことではないかと実行委員の間で話し合い、石田さんにも相談し、勇美記念財団にも了承をいただき“その2”開催を決めました。

結果、1回目では、これからの看護を担う学生さんにいのちの重さや我が家の大切さ、人と人とのつながりの温かさ、家族のありがたさ、心のよりどころの必要性等を感じてもらえたことが有意義だったと思います。

また、2回目の会では、仮設住宅はあくまでも仮の入れ物であり、そこでは心は癒されません。その人にとっての“第2の我が家「こらんしょ」”で語り合うことにより、福島市内に住む被災者の心が癒され、同志の輪を広げられるのだと思います。原発事故を受け、家を失い、あるいは帰れず、仮設住宅や借り上げ住宅で生活している住民との交流がより和やかに深まったと感じます。また、石田さんを通して在宅療養の重要性と支える側のつながりの大切さについても理解されたと思います。そして、それぞれの思いを共有し互いのつながりの中から一住民として生きる力を取り戻すことにもつながるのではないかと期待しています。

4. おわりに

今回の本音で語る広場を2回にわたって開催するにあたり、ここさくらんしょのボランティアにも携わったメッセンジャーナースの4人で6月から実行委員として企画を練り始めました。違う職場の者同士ですが、1か月に1回勤務後の時間に集まり夜遅くまで話し合いを重ねながら無事終了することが出来ました。また、ここさくらんしょでご主人の介護をしながら生活し管理人もなさっている石田さんの多大なご協力で家庭的な雰囲気の中で進行することが出来ました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

天災だけではなく人災まで被った結果、その人の人生そのものが詰まった我が家はあるのに帰れない、これはいのちをないがしろにされているのと同じだと感じています。本来なら住み慣れた我が家で寿命を全うして最後を迎えていたであろう方々もこんな不条理に見舞われていいわけがありません。それでも不屈に生きていこうとする被災住民の方々のいのちへの畏敬を感じるとともに、せめて家らしい家に住める環境を整え、当たり前の生活に戻れるような支援の継続を願ってやみません。

最後に、在宅での看取りという視点とは少し違った内容になったかもしれませんが、在宅を語ろうにもその家がない方たちの心の声を聞くことも、在宅療養の重要性を推し量ることにつながると考えます。2回にわたって開催することが出来ましたのも公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成があつてのことと感謝いたします。

以上、公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による市民講座開催のご報告をいたします。

仲野 佳代子

